わが牙よ眠れ

上

魚住洵

わが牙よ眠れ

上

わが牙よ眠れ　上

1999年5月1日　発行

著　者　魚住　洵

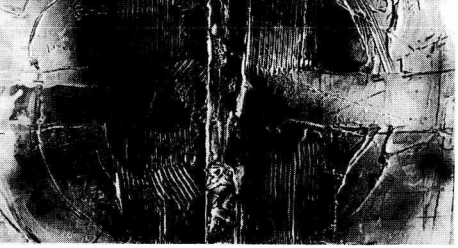
岩手県盛岡市厨川3－12－41
郵便番号020－0124
電　話（019）641－6290

発行所　有限会社博光出版

岩手県盛岡市みたけ5－8－43
郵便番号020－0122
電　話（019）641－0671
FAX（019）641－7474

本書の無断複写は著作法上での例外を除いて、禁じられております。
乱丁本・落丁本は小社あてにご返品下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
価格は表紙カバーに表示してあります。

ISBN 4－938681－49－8－C0093



目次・わが牙よ　眠れ　上

球形の網　7
仮面の人々　57
不毛の田園　111
粉飾の画策　163

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

牙むく羊たち　221
虚妄の終焉　283

わが牙よ眠れ

上

球形の網

1

夕暮れの街灯りが、妙に眩しくよそよそしい。一日のうちで、およそ今時の時間程人間の心を何事かに駆り立てる時はないだろう。落日に誘われ、一斉に家路を急ぐこの雑踏の流れの時こそ、帰巣本能が甦える人間たちの最も心素直な時間帯なのかも知れない。

県都R―市大通り商店街の交差点前、電光掲示が五時五十四分を示している。私はゆっくりと人の流れに入って通り沿いを南下し始めた。通りを右に折れたところで、六時のチャイムが鳴り出した。裏通りの小路に足を踏み入れると、そこはもう生暖かい薄暗がりの中に柔らかな灯りがもれて、あたりは既に静かな夜の世界が広がっている。

小路の通りを二つ突っ切ると、丁字路の突き当たりに一軒のスナックが私の目に映った。開き戸の窓に燈りが点っているのを見て、私は少し歩調を緩めた。

『スナック銀河』、一室六、七坪程のごくありふれた小さな酒場だが、この店の雇われママの諒子が『クラブ・モンパリ』を辞めて以来だから、もう、三年はこの店に通っていることになる。私は仲間と一緒に『クラブ・モンパリ』にも三年ばかり通い、その間一度も欠かすことなく諒子を指名し続けてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

だが今夜は普段のように気を許してはならない。口が固いといっても所詮、男と女の話題は人の耳に漏れない訳がない。ただ諒子とは、体の関係こそ持っていないが六年間の交際の中で、互いに飲み仲間としての信頼関係を積み上げてきた実績がある。そう言う意味では、私にとって諒子は唯一、友情のみで繋がっている女であると言っていい。

ドアを押し、店の中に足を踏み入れようとして私は驚いて立ち止まった。狭い店の入口を諒子が中腰で掃いていた。諒子は私を見ると私に近寄り片手を首に捲く仕草をした後、私の胸を軽く突いて笑った。

「随分な御無沙汰だったのね」

諒子はそう言った後、突然私に箒を渡してカウンターのなかにあわてて飛び込んだ。何やら煮物の鍋が沸騰していた。私は手に預けられた箒で側にあったチリ取りに僅かばかりの埃を寄せ集めた時、諒子がカウンターから出てきた。

「今日はどうしたの？　随分早いのね。ああ、そうか？　今晩これからどこかに出かけるんだ。そうでしょう？」

諒子は私のコートを脱がせ終えるとカウンターに戻った。付け睫なのだろうか？　注ぐビールを見つめる諒子の真近な目もとが華やいでいる。

「やっぱり転任することに決まったんですか？」

「もう決まった」

「R―市内の学校でしょう？」

「行き先はまだ解らない」

私は諒子が出したオデンの大根を箸でつついた。諒子はもう私の転任先を知っているのかも知れない。校内機密で校長の転任告知がなされても、一番先にその行き先を嗅ぎつけるのはこうした水商売の女達である。管外へ転任と知れば、彼女たちの振る舞いに微妙な変化がみられることも、私はよく心得ていた。

「おれ、ダイコンとカブが好物なんだ」

「じゃあ、もう二つ、三つサービスしてあげる」

そう言って、諒子は皿の中に煮しまった輪切りのダイコンを盛り付けて戻ってくると再び話しかけてきた。

「学校の先生というのは、職場が違ってしまうと一緒には飲まなくなるものなの？」

「そう、お互い今までのように飲めなくなるだろうな」

「安達さんたちとも？」

「そう、今度は新しい仲間と飲むさ」

「でも、男は女と違うと言うよ。六年間も皆で一緒に飲んできたのに、学校が変わっただけで友情がなくなるものなの？」

「そうさ、一緒に暮らしている男と女だって愛の形がいつの間にか変わるんだ。まして職場を離れてしまった男の友情なんて変わらない方がおかしい。大体おれたちに、友情があるなんて本気で思っていたのかい？　いつか花井もそんなことを言っていたが…」

口に出してから、私はふと花井の生気のない表情を思い浮かべた。諒子は私が口にした花井の名を聞くとすぐ否定し不満な顔で言った。

「あの人はクールだけど、人情のある人よ。そんな篠さんの話を聞くのはいや。人の情けを頼りに生きてる私たちにとって、友情は何より大切なのよ。これからもみんな仲良く飲みましょうよ。飲む時だけでもね。そうでしょう?」

諒子は私にビールをつぎながら笑いかけたが、その目は笑っていなかった。今夜のこの時に、まずいことを口にしたのかと私は微かに悔いたが、諒子はすぐ機嫌をもどした。戸棚から酢物の小鉢と漬け物を持って来ると諒子は再び私に訊ねた。

「その花井さんはどうなの? 先生を本当に止めることにしたの?」

「さあ、おれには解らない。花井にもまだ解らないんじゃないの?」

「決心がつかないと言うこと?」

「いや、自分で教師を止めたい理由がさ」

その時、入口のドアがカタンと鳴った。私は一瞬驚いたが、いぶかる諒子を片手で制した。

「風の音だろう。おれがちょっと覗く」

私は直ぐスタンドから降り、入口のドアを静かに引いた。誰の姿もない。光子である筈はないと思いながらも気掛かりであった。光子との打ち合わせではこれから四十分程後のかっきり七時五分、店のドアの前で、タクシーに乗り込んでいる光子からフォーンで二回、合図が送られることになっているのだ。

ドアを閉め際、私は屋根の上の空を見上げながら、もう一度三方の建物の陰に目を走らせたが誰の姿もない。

暮れ泥む黄昏の空に、まだ薄茜の雲が浮かんでいる。腕時計を見ると、針は六時二十七分を

指していた。
「誰かと落ち合うことになっているの？」
「まあね。相手が来てくれればの話だが」
「だれ？　私の知ってる人？」
私は諒子の言葉が煩わしく思えてきた。
「ブランデーに切り変えよう。ボトルを……」
私が言いかけた時であった。入口のドアが開くと突然、サングラスで顔を覆ったグレーのコートの男がノッソリ姿を現した。その男は花井であった。諒子は闖入者が花井だと解るとけたたましく笑い出し頓狂な声を上げた。
「なに？　その格好！　どうしたの、花井さん？……今夜は本当におかしな夜だこと―」
だが花井は諒子に右手を挙げただけで黙って私の側に腰を降ろした。私はふといつもの花井と違うのに気付いた。だがそれにしても、この時間この場所に、なぜこいつは現れたのだろうか？
「噂をすれば影とは良く言ったものね。でも篠原さん。あなた達初めからここで落ち合う約束をしていたんでしょう？」
諒子は弾んだ声を出したが、私は諒子の出したブランデーを無言のまま花井のグラスに注いだ。その時を待っていたように、傾いた私の耳もとへ花井が口を寄せて囁いた。
「篠原さん。あんたの異動先は柏崎北中学じゃないらしいぞ。何か解らないが突然生田中行きに変更になったそうだ」

花井の押し殺した言葉に、私は息が止まった。サングラスの中の花井の目は薄ら笑っているようであった

「この話は間違いじゃない。生田中の教頭の菅野という男からじかにおれへ、さっき電話が入った」

私はそれを聞いて思わず花井の右腕を捕らえ、静かに引き上げると部屋の隅に連れ寄せた。花井は声を潜めて話し続けた。

「……だがなにより、これはおれの感だが、校長は前々から篠原さんの生田中行きを知っていた筈だと思うよ。別の筋からの情報でも篠原さんの行き先は生田中しか聞こえてこない」

「前から転任先の変更があったとしたなら、校長はなぜ今までそのことをおれに知らせなかったのかな？　生田中へ変更になったのはいつのことなんだろうか？」

「解らん」

花井はぶっきら棒な、いつもの調子に戻って顔を上げた。

「……まあ、座って飲もう」

そう言って花井と共に席へ戻ったが、私は頭の中が暫く話しも出来ない程激しく、異動先の変更のことで動揺していた。

《なぜこんなことになったのだろうか？　おれを動かすことのできるヤツは、あいつしかいない筈……だが、このおれをどうする積もりだろうか？》

私は花井の話の流れの中に、私の生活を監視し蠢(うごめ)いている黒い影と、私の行く手を遮る策動の疑惑を強く感じていた。

正式な教員異動発令日まで、あと三日という切羽詰まったこの時期に、転任先が突然変更になるということは、余程の重要な理由がない限り前例のない事である。確かに人事異動は土壇場まで解らないことが多い。だが、こうした土壇場の異動はその理由の詳細な説明を受け、該当者の納得で行われるのが普通である。

しかし、花井から話を聞いて、下沢校長の口からその真相を引き出すことは殆ど不可能に近いだろうと私は思った。人は良いが気の弱い下沢の性格を、私は僅かな職場でのつきあいでよく知っていた。常に上におもね、そしていざとなれば保身のため、塗り固めた偽りの世辞と、時にちらつかせる校長の権限で私を追い込んでくるのは間違いないところである。俯いている私に

「篠原さん。なんか有ったの?」

心配げに諒子が声をかけてきたが私は顔を上げて首を振った。

「ああ……だが、何でもない」

ふと気付いて腕時計に目をやると、七時を一分回っている。光子との約束の時間まで、あと四分ある。私は残った時間をこの場の切り上げに当てようと、花井に声をかけた。

「花さんはこれからどうするの?」

「別に…　今の話を篠さんに伝えたかっただけだ。」

「サンキュー。恩に着るよ。このボトルは空にしてくれていい。また何かあったら宜しく頼む……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.